

狐ヶ迫横穴群

福岡県田川市大字弓削田所在横穴群の調査

田川市文化財調査報告書

第 1 集

1981

田川市教育委員会

序

当市での市民文化振興の気運の高まりとともに文化財保護に対する関心も益々高まっている今日、埋蔵文化財の発掘に手がけることができ得ましたことは、まことに幸いでありました。

当市では、すでに田川郷土研究会が長い間、各分野にわたり調査活動をつづけ、多くの貴重な資料を発表されています。また、田川市史編纂委員会によりまして昭和49年3月以来、田川市史が3巻に編集、発刊され、本市の文化遺産の開発はさらに前進し、これらの文化遺産は市民生活の中に親しみが持たれてきているものと思えます。

本市で埋蔵文化財発掘調査が組織的に行なわれましたのは、天台寺瓦窯址（田川市上伊田）、セスドノ古墳（田川市東町）以来のことです。この狐ヶ迫横穴群発掘調査の報告書が出版される運びとなり、関係者として喜びにたえないことであります。

古代史研究の資料として、また、文化向上の一助となり埋蔵文化財保存の契機ともなればと念ずる次第であります。

この調査の実施にあたり、直接にたずさわっていただき、指導、助言下さった県文化職員の方々、深いご理解とご協力をいただいた地元並びに発掘作業に関係されました方々に心から厚くお礼申し上げます。

昭和56年3月31日

田川市教育委員会

教育長 角 銅 圓

I はじめに

本調査は土取工事に伴う緊急発掘調査として市が国及び県の補助を受けて実施したものである。遺跡は福岡県田川市弓削田にあり、古くから「狐ヶ追横穴群」として知られ、福岡県遺跡等分布地図に記載されている。

昭和55年11月、土地所有者の佐竹康久氏より土取工事を実施する旨の連絡が田川市教育委員会にあった。市教育委員会は遺跡の重要性を考慮して、ただちに県教育委員会文化課と連絡をとった。11月20日、県文化課主任技師川述昭人が現地へ赴き、県文化財保護指導委員水上薩摩氏、県教育庁田川出張所、市教育委員会、土地所有者立合いのもと確認調査を行った。

現地には10数基の横穴が所在することが判明し、数年前の盗掘によると思われる掛出土が多数の箇所で見つめられた。現状保存をも含めた協議を行ったが、結果は発掘調査を実施して記録保存することになった。なお、見立病院の増築に合わせて、土取り工事を実施したいという土地所有者の要望があり、発掘調査は市が事業主体となって昭和56年1月20日から2月23日の間で実施した。

調査関係者は下記のとおりである。

調査責任者	田川市教育委員会	教 育 長	角 銅 圓
	同	教 育 次 長	永 末 十四生
	同	社会教育課長	檀 林 栄三郎
	同	同 課長補佐	酒 井 一 雄
	同	同 係 長	古 賀 英 治
	同	同 主 事	篠 原 隆 幸
調査担当者	田川市教育委員会	嘱 託	長谷川 清 之
	福岡県教育庁文化課	主 任 技 師	川 述 昭 人
	同	同	新 原 正 典

このほか、金川中学校教頭花村利彦氏はしばしば現地に足を運ばれ、調査の指導・助言を受けた。また、県文化課井上裕弘・酒井仁夫・副島邦弘・木下修・伊崎俊秋の諸兄は、報告書作成の忙しい時期に遺構実測に支援された。さらに、北九州教育文化事業団埋蔵文化財調査室小方泰宏氏の応援も受けた。最後に発掘作業に従事された田川高齢者事業団の方々と、田川東高等学校考古学クラブ、西川川高等学校の諸氏に感謝の意を表します。(川述昭人)



第1図 周辺遺跡分布図 (縮尺 1/25,000)

II 位置と環境

田川地方は、北を除く三方を山で囲まれた盆地帯で中央に遠賀川の支流である彦山川、中元寺川の二大河川が縦断している。これらの河川に沿って古第三紀層を主体とするなだらかな丘陵が連なる。これらの低丘陵や台地上には多くの遺跡が分布している。

狐ヶ迫横穴群は、川崎市大字弓削田字狐ヶ迫に所在する。遺跡は西の船尾山より派生する丘陵の先端部に位置し、東に中元寺川の流れに沿ってなだらかな弓削田原の台地が続く。周辺は古くより弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が知られていたようで昭和29年田川市役所発行の「田川市誌」によると、弓削田原、見立原、川宮原周辺および狐ヶ迫付近に古墳の所在が記されているが現状では宅地造成や開墾のため場所の確認さえも難しい状態であり、狐ヶ迫横穴群の北約200mの貴布禰神社境内に3基の円墳が確認されるにすぎない。

また昭和28年に弓削田原から合口竊棺が出土したと記されているが、これは下弓削田変電所整地作業中に出土したと云われているものと同一であろう。遺物は現在所在不明である。このほかにも弓削田中学校敷地内より銅鏡が出土している。そしてこの台地は糸田町の窪田古墳群、竊棺を出土した上糸田遺跡、松ヶ迫遺跡へとつづく。

また東へ約700mには法光寺横穴群がある。中元寺川流域の横穴群は現在までにこの横穴群のほか今回発掘された狐ヶ迫横穴群、大三輪神社境内横穴群、戸山原横穴Ⅰ・Ⅱ群、中元寺横穴群の6例しか確認されておらず、横穴群が濃密に分布する彦山川流域に比べると対照的である。また南1kmには小型の横穴式石室を主体部とする古賀古墳群、その東600mには古式の様相を呈す前方後円墳の位登古墳がある。これより上流の中元寺川沿岸の丘陵地帯には弥生時代の遺跡群が広がり、東側丘陵には池中下遺跡、浦ノ谷遺跡、上貞崎遺跡が連なり、西側丘陵にも相対するように鎮西原遺跡、太田遺跡、真崎遺跡などの遺跡がつづき、これらに重複して古墳が存在する。とくに川崎町田原周辺には石橋迫西古墳群、鎮西原古墳群など古墳の密集地域をつくっており、その規模は彦山川流域の夏古古墳群につぐものである。また真崎より広がる石灰台地には前述した戸山原横穴群、中元寺横穴群が分布する。

以上、狐ヶ迫横穴群の位置する中元寺川流域の遺跡を列記してみたがほとんど内容的に充分把握されておらず、今後の調査研究が望まれる。

(長谷川清之)

- | | | | |
|--------------|-------------|------------|------------|
| 1. 宮山遺跡 | 2. 松ヶ迫遺跡 | 3. 原遺跡 | 4. 窪田古墳群 |
| 5. 古賀峯石棺群 | 6. 貴布禰神社古墳群 | 7. 狐ヶ迫横穴群 | 8. 弓削田原遺跡 |
| 9. 法光寺横穴群 | 10. 古賀古墳群 | 11. 下位登遺跡 | 12. 位登古墳 |
| 13. 大三輪神社横穴群 | 14. 石橋迫西古墳群 | 15. 西田原古墳群 | 16. 鎮西原古墳群 |
| 17. 鎮西原遺跡 | 18. 池中下遺跡 | 19. 太田遺跡 | 20. 浦ノ谷遺跡 |

Ⅲ 遺構と遺物

1. 横 穴

狐ヶ迫横穴群は南から伸びてくる丘陵の西側斜面および一部東斜面に所在する。北東部斜面は昭和41年の造成工事によって削平されているが、その折、横穴式石室を主体部とする円墳が発見されている。

今回調査の対象となったのは上記の造成により削平された部分の西側斜面に所在する14基の横穴である。これらの横穴はほとんどが地盤軟弱のため落盤しており盗掘をまぬがれていたが天上部の残存するものはわずかに6号、7号横穴だけであった。また、1号横穴以北は断層があり、横穴は存在しなかった。

横穴群の位置する斜面下には人家があり、安全対策上墓道上部に柵を組んだため、墓道途中で発掘を放棄せざるをえなかったために、墓道部分を完掘したのは7、8、9、10号横穴のみであった。

1号横穴(第3図、図版1)

玄室と羨道は落盤しており、主軸方位N-71.5°-Eで西南西に開口する。玄室平面形は不整形で長さ1.8m、奥壁幅1.38m、玄門部で0.63mである。墓道は発掘区域内で5.5mと長く、墓道中ほどの位置で角張って幅を広める。

2号横穴(第3図)

玄室と羨道は落盤しており、主軸方位N-86.5°-Eで西向きに開口する。玄室平面形はまるみをおびた台形で長さ1.5m、奥壁幅1.3m、玄門幅0.55mで羨道部は長さ0.85m、羨門幅0.45mである。玄室の中央と周囲には周溝がめぐり、羨門部は段がつき閉塞石が残存していた。墓道は3.0mで中ほどの床面に段がつく。1号横穴の墓道と切り合う。

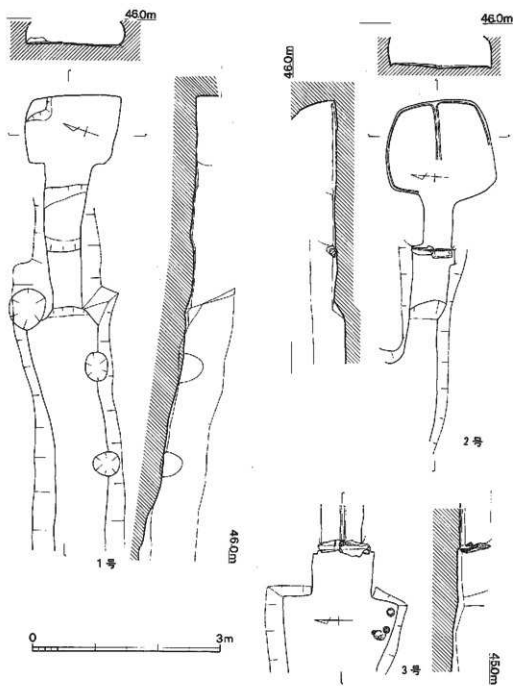
3号横穴(第3図)

玄室と羨道が落盤して危険なため、羨道部途中で発掘を中止した。主軸方位N-89.5°-Eで西向きに開口する。

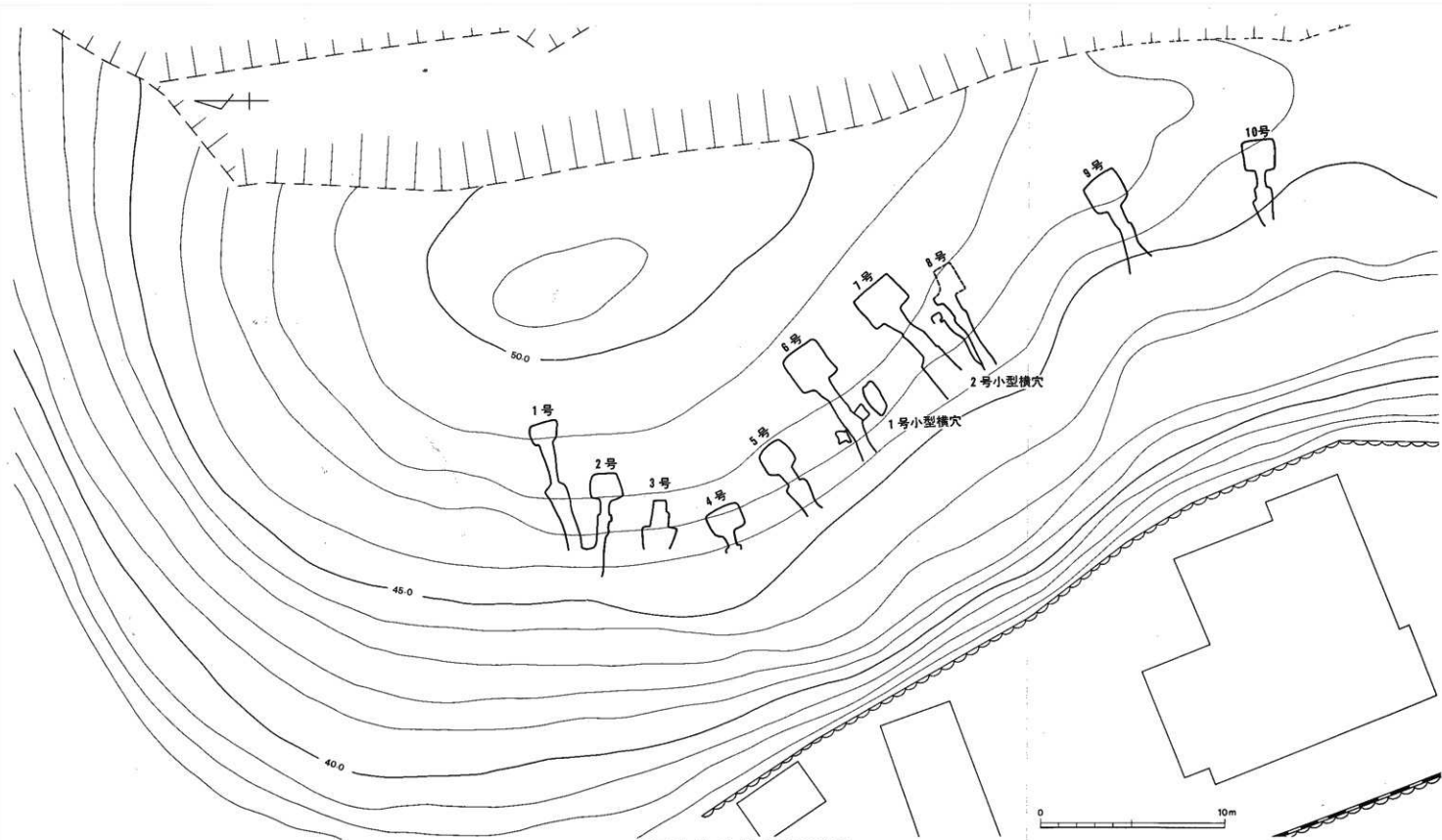
羨道は中央に溝が通り、羨門部で段がつき閉塞石が残存する。墓道は閉塞より0.7mのところまで角張って幅を広める。

4号横穴(第4図)

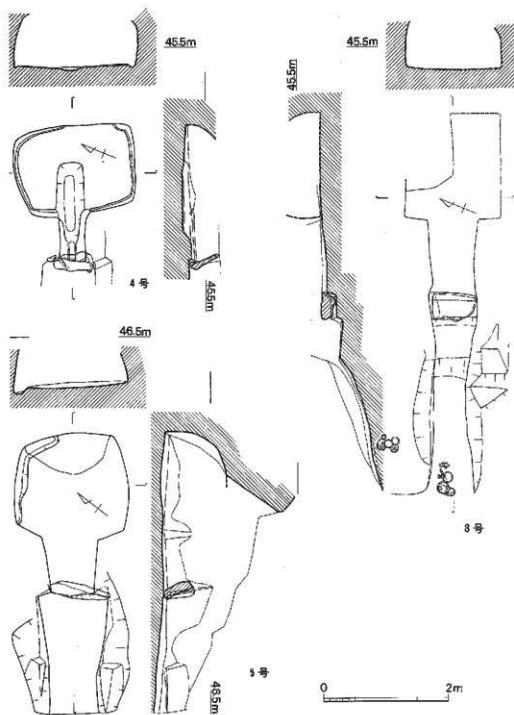
玄室と羨道は落盤しており、主軸方位N-67.5°-Eで南西に開口する。玄室平面形はまるみをおびた方形をなし、長さ1.45m、奥壁幅1.8m、玄門幅0.45mで羨道部は長さ0.8m、羨門幅0.4mである。玄室には奥壁の一部を除いて周溝がめぐり、玄門部に排水のためと思われる掘



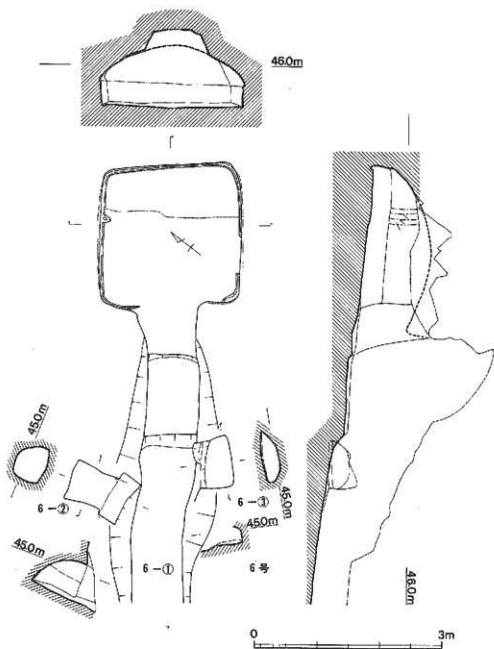
第3図 1・2・3号横穴実測図 (縮尺1/60)



第2図 遺構配置図 (縮尺 1/200)



第4图 4・5・8号横穴夷测图（缩尺1/60）



第5图 6号横穴实测图 (缩尺1/60)

り込みがあり、羨道中央の溝につながる。羨門部は床面に段がつき閉塞石が残存する。

5号横穴(第4図、図版1)

玄室と羨道は半分以上が落盤しており、主軸方位 $N-53^{\circ}-E$ で南西に開口する。玄室平面形はまるみをおびた方形で、長さ1.65m、奥壁幅1.4m、玄門幅0.9mで立面形はアーチ形で奥壁に稜線が残る。羨道部は長さ0.9m、羨門幅0.7mである。周溝は左側壁から奥壁にかけて掘られている。羨門には閉塞石が残存するが段はつかず、ゆるい斜面になっている。

墓道は発掘区域内で1.85m検出され、真中付近、両側に開いた状態で角張り幅を広める。奥壁中央付近より人骨片が出上した。

6-①号横穴(第5図、図版2)

玄室と羨道は一部落盤しており、主軸方位 $N-53.5^{\circ}-E$ で南西に開口している。玄室平面形は方形で、長さ2.8m、奥壁幅2.05m、玄門幅1.0mで羨道部は長さ0.8m、羨門幅0.8mであり、大型の横穴である。玄室立面形は家型で玄室周囲に軒をめぐらし、天井部の一部には工具痕が残る。玄室床面は奥壁付近が若干の高まりをみせる。墓道は発掘区域内で3.95mあり、中ほどの床面は段がつき、両側に相対して2基の小型横穴が存在する。玄室右袖付近で鉄線出土。

6-②号横穴(第5図、図版2)

玄室に向かって左側の横穴で、主軸方位 $N-16^{\circ}-W$ で南に開口し、全長0.65m、奥壁幅0.65m、羨門幅0.55mで、平面形は奥壁幅がやや広がる方形である。床は羨門部で斜めに下がる。

6-③号横穴(第5図、図版2)

6-②号横穴と相対した位置にある横穴で、主軸方位 $S-43^{\circ}-E$ で北西に開口し、全長0.5m、奥壁幅0.85m、羨門幅0.71mで平面形はまるみをおびた方形で、奥壁幅がやや広がる。床は羨門部で斜めに下がる。

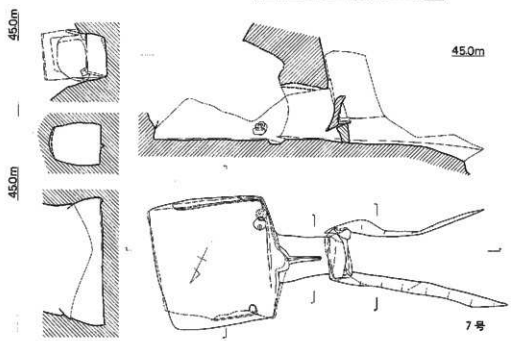
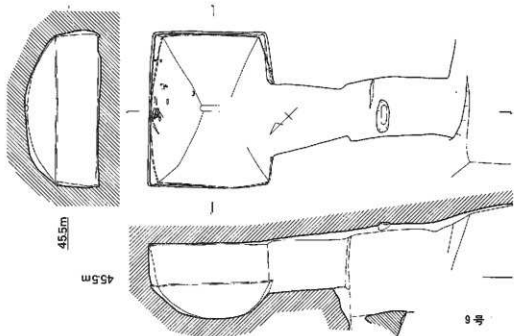
7号横穴(第6図、図版3)

玄室は一部落盤するが、ほぼ完全な形で残っていた。主軸方位 $N-47^{\circ}-E$ で南西に開口する。玄室平面形は横長の方形で長さは1.98m、奥壁幅2.4m、玄門幅1.12m、高さ1.19mで羨門部は長さ1.05m、羨門幅0.75mである。立面形は家形で側面に軒をめぐらし、天井には稜線が入る。玄室周囲には周溝がめぐる。羨門斜上部には墓道両側上部の地山を平世に削り、その上に柵石を架けていた。

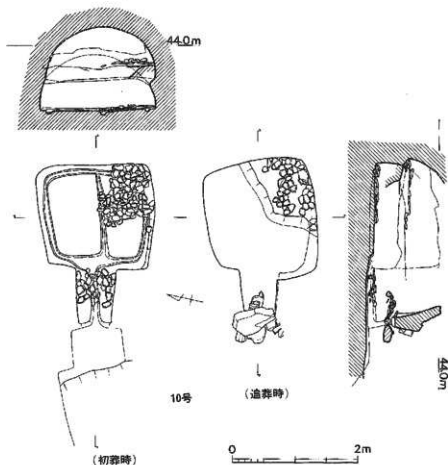
8号横穴(第4図、図版3)

玄室と羨道は落盤しているため平面形は明確に把握できないが残存している部分から推定するならば玄室平面形は方形で、主軸方位 $N-68^{\circ}-E$ で南西に開口する。羨門部は段がつき、閉塞石が残存していた。墓道は3.1mで羨門前で平坦面をつくるが、すぐに急な斜面となって降下する。墓道正面右側には基壇が残る。

9号横穴(第6図、図版4)



第6图 7・9号横穴夷測図 (縮尺1/60)



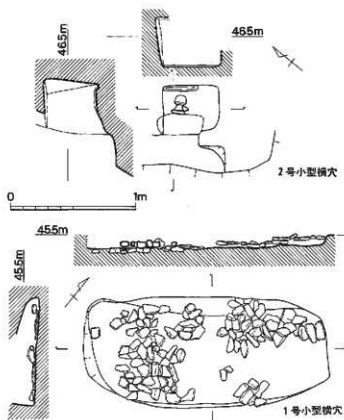
第7図 10号横穴実測図(縮尺1/60)

玄室は落壁しており、主軸方位 $N-64.5^{\circ}-E$ で南西に開口する。玄室平面形は方形で長さ2.0m、奥壁幅1.85m、玄門幅0.75m、羨道部は長さ1.0m、羨門幅0.6mである。玄室右側壁から羨道中央にかけて周溝が走り、側壁の一部に軒が残る。羨門部は段がつかないが、閉塞された状態で残っていた。閉塞には石灰岩の板石を2枚重ね、その隙間に板石が倒れないよう小石を挟み込んでいた。墓道は1.95mと短い。

10号横穴(第7図、図版6)

玄室と羨道は落壁していた。この横穴は一次埋葬後落壁しており、その埋土上のレベルで地山を整形し、敷石をして新たな屍床としている。

主軸方位 $N-78^{\circ}-E$ で西向に開口する。一次葬の平面形は方形で長さ1.65m、奥壁幅1.75m、玄門幅0.65m、羨道部は長さ0.8m、羨門幅0.5mである。玄室の周溝と主軸線上に周溝を有す。特に玄室右側の溝は2重になっており、周溝状を呈す。右奥壁周辺と羨道部に河原石の



第8図 1・2号小型横穴実測図（縮尺1/30）

敷石が遺存する。

2次埋葬時の玄室平面形はやや丸みをおびた方形で、長さ1.9m、奥壁幅1.55m、玄門幅0.6mである。奥壁の右側隅には、溝を意識したとみられる堀り込みがある。玄室中央より奥壁にかけて河原石の敷石が施されていた。左側方位は落盤した岩盤のため敷石ができない状態であった。閉塞は小石を積んだレベルで、土を堅く踏み固めその上に石灰岩の板石を立てかけていた。

1号小型横穴（第8図、図版5）

主軸はN-50.5°-Eにとり、主軸長1.85m、中心幅0.87mで平面形は細長い楕円形を呈す。床面は起伏がはげしく、その上に栗石を敷いていた。縦断面は両端が垂直に立ち上がり、横断面では一方の立ち上がりが内傾している。入口は現状では充分に把握できなかった。

2号小型横穴（第8図、図版5）

8号横穴の左上部に位置し、主軸方向N-51°-Eで南西に開口し、全長0.39m、奥壁幅0.43m、入口幅0.27mで奥壁に溝を有す。内部には土器が埋納されていた。（長谷川）

2. 遺 物

(1) 装 身 具

耳環 (第9図1~3、図版7)

1は8号横穴閉塞石上面の攪乱土中出土品である。腐蝕が著しいため銅地のみ遺存している。長径32mm、短径29mmで断面は円形を呈する大型品である。2は7号横穴玄室床面出土品であり、銅地に金箔を被せている。長径23mm、短径20mmで断面は円形を呈する。3は9号横穴墓道出土品であり、腐蝕が著しいので銅地のみ遺存している。径21mmを測り、断面は円形で細味である。

貝輪 (第9図4・5、図版7)

ともに7号横穴玄室出土品のイモガイを輪切りにしたもので2個体分がある。5は内径3.5cm～6cmに復元できる。

(2) 鉄 器

鉄鏃 (第9図6~19、図版7)

6~11は7号、12・13・18は2号、15~17・19は6号、14は8号横穴出土品である。鏃の形態から5分類できる。6は筈被面丸造脇袂柳葉式であり、略完存する。全長8.4cmを測る有茎鏃である。^(註1)7~11は片切刃造被面被蓋箭式であり、遺存状態は極めて良好である。全長は17.5cm~19.1cmとまちまちであるが、これは茎長の相違によるものである。鋒は稜を有し両側面は若干内傾している。7は矢柄が遺存し、糸巻き痕が明瞭にみえる。一括品であり総数は20本である。12~14は筈被片丸造蓋箭式である。15は片丸造脇袂三角式と、16と同じ脇袂片刃箭式が錆着している。

刀子 (第9図20・21、図版7)

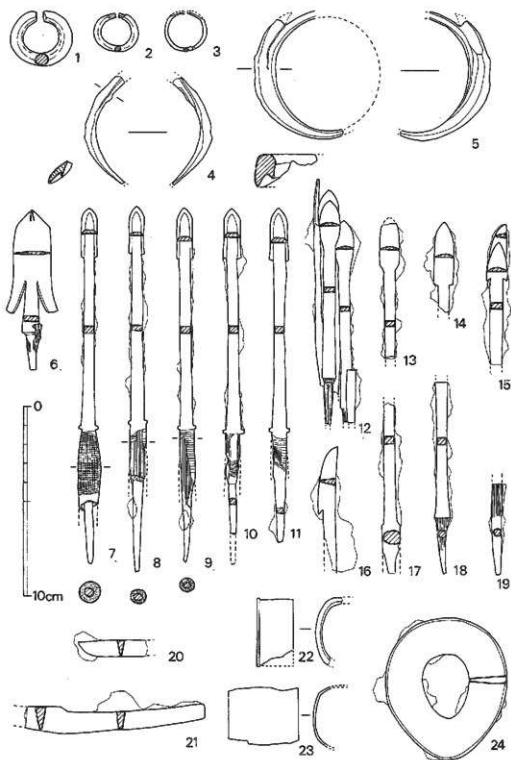
9号横穴出土品であり、同一個体と思われるが身部を若干欠損する。棟方向に段がつく片開造りである。茎部は7.3cmを測る長いものであり、直線ではなく棟側へ反っている。

刀装具 (第9図22~24、図版7)

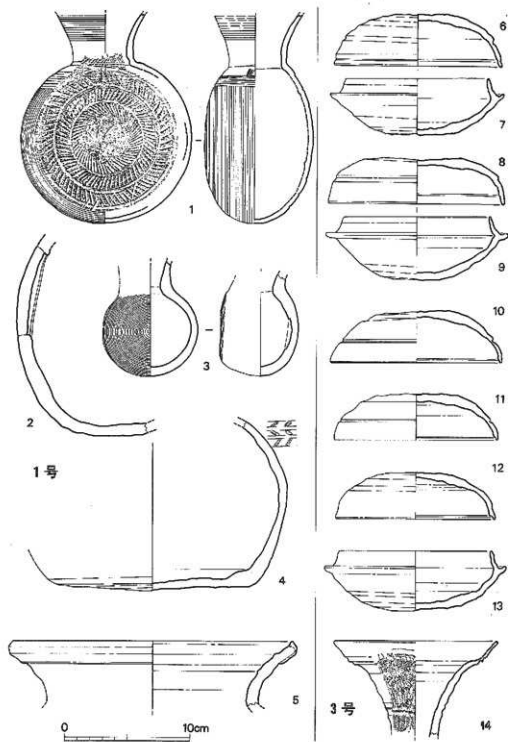
22は鞘口金具であり、内側に木質が遺存している。23は鞘尻金具であり、内側に木質が遺存している。22・23は7号横穴出土の鉄製品である。24は9号横穴玄室出土品の無窓の鐔である。例卵形を呈しており、外縁の長径7.4cm、短径6.4cm、内縁の長径3.3cm、短径2.5cmを測る。断面は内側が薄く造られている。

(3) 土 器

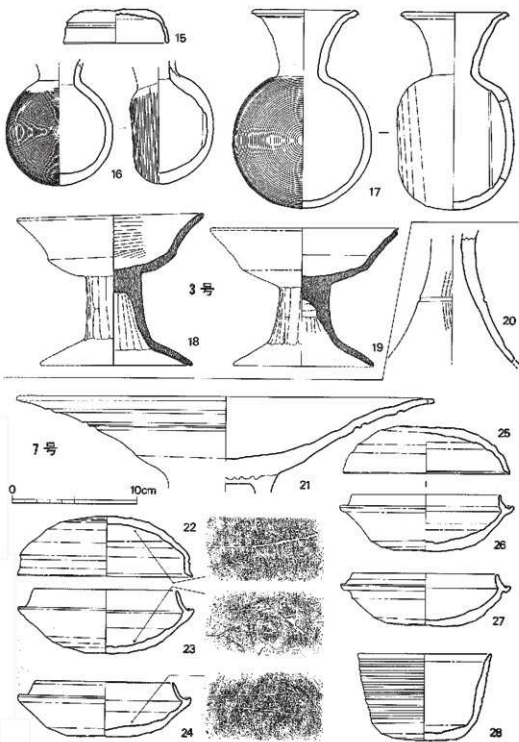
今回調査した12基の横穴のうち土器を出土したのは1号・3号・6号・7号・8号・9号・10号・2号小型横穴の8基である。個体数は図示しえなかった数例を加えると総数70数個体となる。器種は、須恵器では、杯蓋・杯身・高杯・琖・碗・提瓶・平瓶・甕蓋・脚付長頸甕・甕が出土しており、横瓶は検出されなかった。土師器では高杯が出土した。



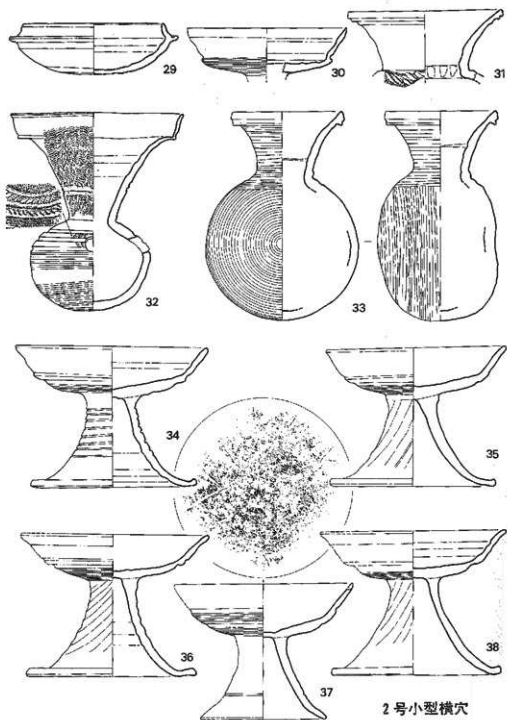
第9圖 裝身具、鉄器実測図(縮尺1/2)



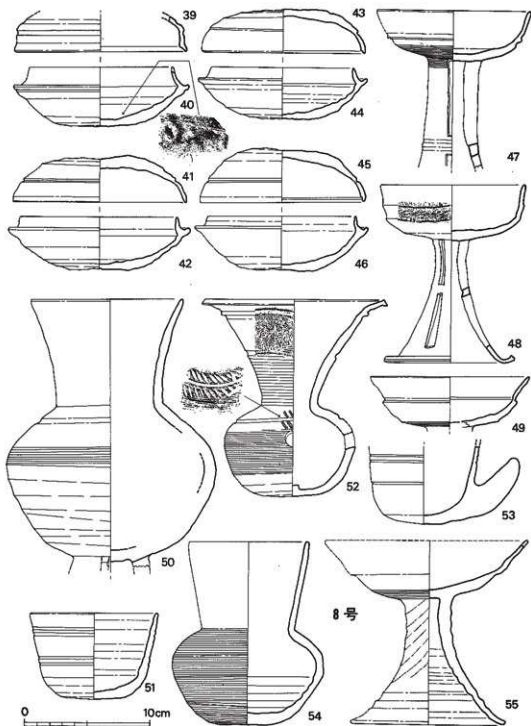
第10圖 土器 実測圖 ① (縮尺1/3)



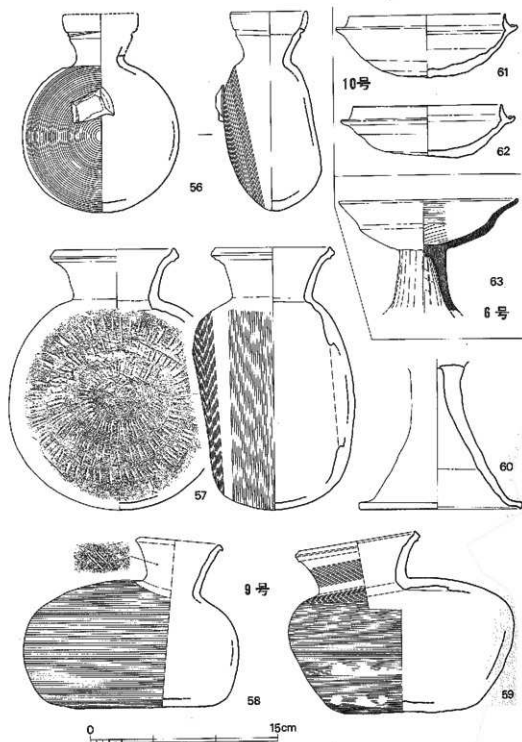
第11圖 土 器 実 測 図 ② (縮尺 1/3)



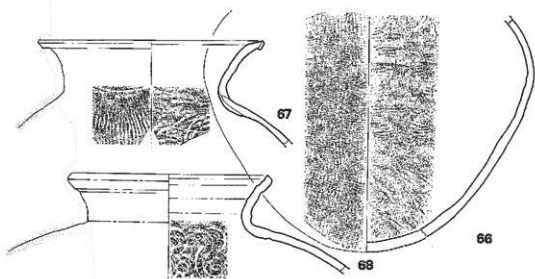
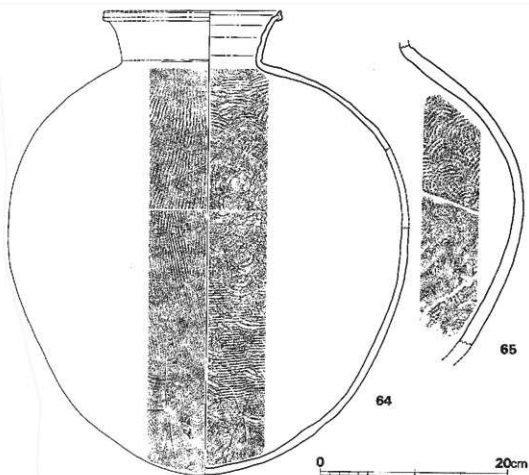
第12図 土 器 実 測 図 ③ (縮尺 1/3)



第13圖 土器 実測圖 ④ (縮尺1/3)



第14圖 土器 実測 図 ⑤ (縮尺 1/3)



第15圖 土器 夾 洲 図 ⑥ (縮尺1/4)

第1表 土 器 観 察 表

番号	器種	出土地点	法 量 (cm)				調整法及び特徴	色 調	焼成
			口徑	器高	立上り高	胴部最大径			
1	提 瓶	1 号	16.3	+		13.6	胴部の両面に突起の横文を有す。胴部に若干の凹みあり。器底下に刻文が入る。	褐 色	不良
2	提 瓶	1 号 裏面					胴部の両面に突起の横文を有す。器底はへら削り上を若干と有する。器底裏面に刻文が入る。	灰 色	良
3	提 瓶	1 号 裏面	9.2	+		7.5	口縁部はへら削り上を若干と有する。器底裏面に刻文が入る。	茶 色	良
4	平 瓶	"					口縁部はへら削り上を若干と有する。器底裏面に刻文が入る。	灰 色	良
5	瓶	"	22.2				胴部はへら削り上を若干と有する。器底裏面に刻文が入る。	灰 色	良
6	杯 蓋	3 号 裏面	13.3	4.1			天弁部と杯蓋の間にシヤープな凹みが入り。杯蓋より内側の面に突起が入る。天弁部はへら削り上を若干と有する。	淡 茶 褐色	良
7	杯 身	"	11.4	4.5	1.6		口縁部はへら削り上を若干と有する。天弁部はへら削り上を若干と有する。	淡 茶 褐色	良
8	杯 蓋	"	14.0	3.6			天弁部と杯蓋の間にシヤープな凹みが入り。杯蓋より内側の面に突起が入る。天弁部はへら削り上を若干と有する。	淡 灰 色	不良
9	杯 身	"	11.7	5.0	1.5		口縁部はへら削り上を若干と有する。天弁部はへら削り上を若干と有する。	淡 灰 色	不良
10	杯 蓋	"	13.5	4.0			天弁部と杯蓋の間にシヤープな凹みが入り。杯蓋より内側の面に突起が入る。天弁部はへら削り上を若干と有する。	暗 灰 色	良
11	杯 蓋	"	12.9	3.7			天弁部と杯蓋の間にシヤープな凹みが入り。杯蓋より内側の面に突起が入る。天弁部はへら削り上を若干と有する。	暗 灰 色	良
12	杯 蓋	"	12.7	3.7			天弁部と杯蓋の間にシヤープな凹みが入り。杯蓋より内側の面に突起が入る。天弁部はへら削り上を若干と有する。	暗 茶 褐色	良
13	杯 身	"	12.1	4.8	1.3		天弁部と杯蓋の間にシヤープな凹みが入り。杯蓋より内側の面に突起が入る。天弁部はへら削り上を若干と有する。	灰 色	良
14	杯	"	13.1				天弁部と杯蓋の間にシヤープな凹みが入り。杯蓋より内側の面に突起が入る。天弁部はへら削り上を若干と有する。	外 小豆色	良
15	平 蓋	"	8.3	2.7			天弁部と杯蓋の間にシヤープな凹みが入り。杯蓋より内側の面に突起が入る。天弁部はへら削り上を若干と有する。	暗 小豆色	良
16	提 瓶	"	9.7		8.5		口縁部はへら削り上を若干と有する。天弁部はへら削り上を若干と有する。	茶 褐色	良
17	提 瓶	"	8.5	15.6		11.0	口縁部はへら削り上を若干と有する。天弁部はへら削り上を若干と有する。	灰 色	良
18	高 杯	"	14.9	12.0		12.1	口縁部はへら削り上を若干と有する。天弁部はへら削り上を若干と有する。	赤 褐色	良
19	高 杯	"	15.0	11.0		11.0	口縁部はへら削り上を若干と有する。天弁部はへら削り上を若干と有する。	赤 褐色	良
20	高 杯	7 号 裏面					口縁部はへら削り上を若干と有する。天弁部はへら削り上を若干と有する。	黄 褐色	良
21	高 杯	"	33.0				口縁部はへら削り上を若干と有する。天弁部はへら削り上を若干と有する。	明 褐色	不良
22	杯 蓋	"	13.9	4.8			口縁部はへら削り上を若干と有する。天弁部はへら削り上を若干と有する。	灰 茶 褐色	不良
23	杯 身	"	11.4	5.1	1.7		口縁部はへら削り上を若干と有する。天弁部はへら削り上を若干と有する。	灰 茶 褐色	不良
24	杯 身	"	11.0	4.4	1.5		口縁部はへら削り上を若干と有する。天弁部はへら削り上を若干と有する。	灰 茶 褐色	良
25	杯 蓋	"	13.2	3.7			口縁部はへら削り上を若干と有する。天弁部はへら削り上を若干と有する。	暗 茶 褐色	不良
26	杯 身	"	11.8	4.5	1.3		口縁部はへら削り上を若干と有する。天弁部はへら削り上を若干と有する。	淡 茶 褐色 (外)	不良
27	杯 身	"	11.6	4.2	1.1		口縁部はへら削り上を若干と有する。天弁部はへら削り上を若干と有する。	灰 色	不良
28	碗	"	10.6	6.9			口縁部はへら削り上を若干と有する。天弁部はへら削り上を若干と有する。	灰 黒 色	不良
29	杯 身	2 号 小型横穴	11.2	4.1	1.2		口縁部はへら削り上を若干と有する。天弁部はへら削り上を若干と有する。	暗 小豆色	良
30	高 杯	"	12.7				口縁部はへら削り上を若干と有する。天弁部はへら削り上を若干と有する。	灰 色	良
31	提 瓶	"	12.2				口縁部はへら削り上を若干と有する。天弁部はへら削り上を若干と有する。	灰 茶 色	良
32	瓶	"	13.7	15.6			口縁部はへら削り上を若干と有する。天弁部はへら削り上を若干と有する。	灰 茶 色	良
33	提 瓶	"	8.7	16.5		12.1	口縁部はへら削り上を若干と有する。天弁部はへら削り上を若干と有する。	茶 褐色	不良
34	高 杯	"	15.3	11.3		13.2	口縁部はへら削り上を若干と有する。天弁部はへら削り上を若干と有する。	明 褐色	良

第2表 土 器 観 察 表

番号	器種	出土地点	法 量 (cm)				調整法及び特徴	色 調	焼成	
			口深	器高	立上り高	胴部最大径				
35	高 杯	2号小型横穴	14.2	11.2		13.2	杯部は口下に凹みが入り、底面はカキ目調整する。胴部外面ははじり模がみられる。「赤褐色」土器	明 褐色	良	
36	高 杯	"	14.9	11.4		13.5	杯部は口下に凹みが入り、底面はカキ目調整する。胴部外面ははじり模が美しい。「赤褐色」土器	明 茶褐色	良	
37	高 杯	"	14.3	10.7		10.0	杯部は口下に凹みが入り、口下の底面はカキ目調整する。杯部内面にへう記号を有する。「赤褐色」土器	褐 色	良	
38	高 杯	"	14.8	11.5		13.5	杯部外面近くには凹みが入り、カキ目調整を施す。即ち外面にははじり模がみられる。「赤褐色」土器	褐 色	良	
39	杯 蓋	8号墓道	13.6				大井部と杯部の間に泥が入り接がつく。口縁部内面は斜めに削られて平凹面を有する。	灰 褐色	不良	
40	杯 身	"	11.4	4.7	1.5		立上り部を欠損し、若干内傾させる。底面外面はへう記号を有する。22とセツ	灰 褐色	不良	
41	杯 蓋	8号墓道一括	13.7	3.7			大井部と杯部の間に泥が入る。天部外面はへう記号とし、底面は削りたため削りかばさず。へう記号を有する。	灰 褐色	不良	
42	杯 身	"	12.4	4.2	1.5		立上り内側に、溝の付く凹みがある。杯部は丸く削がつく。底面外面はへう記号。43とセツ	灰 褐色	不良	
43	杯 蓋	"	13.0	3.5			天部部と杯部の間に泥が入る。口縁部内面は泥が染み入る段がつく。天部外面はへう記号	暗 灰色	不良	
44	杯 身	"	11.3	4.1	1.3		立上り内側に、溝の付く凹みがある。底面外面はシャープなへう記号。43とセツ	灰 色	良	
45	杯 蓋	"	13.0	4.2			天部部と杯部の間に泥が入る。口縁部内面は泥が染み入る。天部外面はへう記号	灰 色	不良	
46	杯 身	"	11.7	4.4	1.1		立上り内側に、溝の付く凹みがある。底面外面はへう記号を有する。底面から直立する。	灰 色	不良	
47	高 杯	8号墓道	12.2				杯部は口下に凹みが入る。下方をカキ目調整。胴部は上下段。3つの凹みは彫刻の痕跡がある。	暗 灰色	良	
48	高 杯	"	11.5	14.1		10.4	杯部は口下に若干凹み。直下に利突を記す。胴部は上下段。3つの凹みは彫刻の痕跡がある。	暗 灰色	良	
49	高 杯	"	12.6				杯部は外面中ほどに段を有しており、内面はこの部分に段がある。杯部外面はカキ目調整する。	暗 灰色	良	
50	陶 瓦 類		12.0			16.5	21.2+	杯部の中央より下の部分にへう記号を有する。杯部は大半を欠損するが、3つの凹みは彫刻の痕跡がある。	暗 灰色	良
51	樽	"	10.1	6.8				杯部の中央より下の部分にへう記号を有する。杯部は大半を欠損するが、3つの凹みは彫刻の痕跡がある。	暗 灰色	良
52	甕	"	14.7	15.6		10.3		杯部の中央より下の部分にへう記号を有する。杯部は大半を欠損するが、3つの凹みは彫刻の痕跡がある。	灰 色	良
53	把手 付 陶 瓦 類		8.74					杯部の中央より下の部分にへう記号を有する。杯部は大半を欠損するが、3つの凹みは彫刻の痕跡がある。	明 褐色	良
54	直口罎	"	9.6	14.5		12.0		杯部の中央より下の部分にへう記号を有する。杯部は大半を欠損するが、3つの凹みは彫刻の痕跡がある。	明 褐色	良
55	高 杯	"	16.1	14.6		12.3		杯部の中央より下の部分にへう記号を有する。杯部は大半を欠損するが、3つの凹みは彫刻の痕跡がある。	明 褐色	良
56	提 瓶	9号友室	6.0	15.7		12.5		杯部の中央より下の部分にへう記号を有する。杯部は大半を欠損するが、3つの凹みは彫刻の痕跡がある。	暗 灰色	良
57	提 瓶	"	9.5	20.5		17.6		杯部の中央より下の部分にへう記号を有する。杯部は大半を欠損するが、3つの凹みは彫刻の痕跡がある。	灰 褐色	良
58	平 瓶	"	6.2	13.5		17.1		杯部の中央より下の部分にへう記号を有する。杯部は大半を欠損するが、3つの凹みは彫刻の痕跡がある。	灰 黒色	良
59	平 瓶	9号墓道	9.4	14.4		18.0		杯部の中央より下の部分にへう記号を有する。杯部は大半を欠損するが、3つの凹みは彫刻の痕跡がある。	暗 小豆色	良
60	高 杯	"				13.0		杯部の中央より下の部分にへう記号を有する。杯部は大半を欠損するが、3つの凹みは彫刻の痕跡がある。	褐 色	良
61	杯 身	10号墓道	12.4	4.9	1.3			立上り部を欠損し、内傾する途中から内反する。胴部外面ははじり模がみられる。「赤褐色」土器	灰 色	不良
62	杯 身	"	11.8	4.2	1.3			立上りの断面は三角形を有し、直まする。へう記号は底面の側・前面に施されていた。	暗 灰色	良
63	高 杯	6号墓道	14.2					杯部は口下に凹みが入る。外表面はへう記号。胴部は内外直にへう記号を有する。土加記	赤 褐色	良
64	甕	3号墓道	18.9	48.9		42.5		一連に手造りである。胴部の側は平円形上をカキ目調整。内面は削りたため削りかばさず。へう記号を有する。	灰 黒色	良
65	甕	6号墓道				45.0		手造りである。外表面に平円形上をカキ目調整。内面は削りたため削りかばさず。へう記号を有する。	淡 灰色	不良
66	甕	"				35.0		胴部外面は手造りでありカキ目調整。内面のトキ目にはカキ目調整上をカキ目調整。下平にカキ目調整の文を有する。内面は削りたため削りかばさず。へう記号を有する。	灰 色	良
67	甕	7号墓道	23.7					口縁部内面は平凹面を有する。胴部外面は平円形。内面は削りたため削りかばさず。へう記号を有する。	灰 色	良
68	甕	8号墓道	20.7					口縁部は平凹面を有し、内面は直に入る。胴部外面は削りたため削りかばさず。へう記号を有する。	灰 黒色	良

出土した須恵器54個体のうち、焼成不良品が特に顕著であった。即ち、焼成良好34個体に対し、焼成軟質で不良品は20個体である。さらに焼成良好としたもののうち、いわゆる須恵器特有の灰色系の色調を呈するものは22個体で、残り12個体は小豆色・褐色を呈していた。したがっていわゆる灰色系色調の焼成良好品は22個体で、32個体は焼成不良品である。この焼成不良品の多い事は、窯業技術の未熟さによるものと思われ、当該遺跡の周辺には同時期を窯業開始期とする窯跡が将来発見される可能性がある。

(川述)

註1 後藤守一「上古時代鉄器の年代研究」『日本古代文化研究』

Ⅳ お わ り に

a 「赤焼き」土器について

須恵器の焼成不良品とは異なるが、色調は茶褐色ないし黄褐色を呈する焼成良好の土器がみられる。これは3・16の提瓶と20・21・34～38・55・60の高杯、53の把手付鉢、54の直口壺であり、いわゆる「赤焼き」土器とよばれるものである。提瓶は成形、調整法は須恵器と何ら違いはないが、器壁が厚く、^(註1)シャープさに欠ける点で須恵器とは異なる。焼成は硬質であり、生焼け土器とも異なる。なお、注目すべきは16の提瓶には黒斑がみられる事で、このことから焼成方法は野焼き等による蓋然性が強い。直口壺は、口頸部は土師器的であるが、胴部はへう割りに後にカキ目を施すという須恵器の調整法をとり、焼成は良好であるが、胴部に黒斑を生じている。高杯の34～38、55は杯部下半にカキ目調整を施し、脚柱外面はしぼり痕を残し、内面は横ナデ調整するという須恵器の手法を用いるが、口縁部の特徴は土師器的である。20・21は同一個体ではないが、21の杯部に20の器形の脚がつくものと思われる。21は杯部の丈が低いが器台を思わせる様な器形であるが、須恵器器台にも見られないような形態である。20の脚は腿の調整法等に通有の構状器具による刺突文が入る。

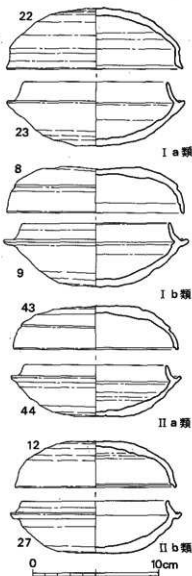
従って、ここでは「赤焼き」土器を、色調は茶褐色ないし黄褐色系を呈し、焼成は硬質もしくは軟質であって、①成形、調整法は須恵器と同一だが、器壁が厚くシャープさに欠けるもの。②成形、調整法は須恵器と同一だが、細部の特徴が土師器的で、しかも全くの土師器とも異なるもの。③最も異なる点は、土器に黒斑がみられるものがある事から、登り窯を用いる須恵器焼成法とは異なる別個の焼成法、例えば野焼き等の焼成方法をとるもの。と考える。

以上のこと^(註2)から、器形の細部において須恵器とは若干異なる点から土師器の工人集団が、須恵器の技法をとり入れた土器を登り窯を用いずに焼成したものを「赤焼き」土器と考える。

「赤焼き」土器の出土状態は、墓道から他の土器とともに出土する場合と、特殊な形態の2号小型横穴への一括供献とがある。

b 須恵器の年代について

横穴から出土した須恵器杯蓋、杯身はⅠa・b類、Ⅱa・b類に4分類できる。



Ⅰa類(22・23) 杯蓋は天井部と体部の境が角張っており、直下は若干くぼむ。口縁端部内面は斜めに切られて平坦面を有する。天井部はへら削り調整で丸味を有する。杯身は、立上りは1.7cmと高く内傾し、端部は丸味を有する。底部はへら削り調整で丸味を有する。

Ⅰb類(8・9) 杯蓋は天井部と体部の境は沈線が入り、角張る。口縁端部内面のやや上方に段を有する。天井部はへら削り調整し、平坦である。杯身は立上り1.5cmで内傾し、端部は丸い。底部外面はへら削りを施す。杯身はa類と大差ない。

Ⅱa類(43・44) Ⅰa・b類に比してひとまわり小形品となる。杯蓋は天井部と体部の境に沈線が入り、口縁端部内面に沈線が入り段がつく。天井部外面はへら削り調整で平坦面を有す。杯身は立上り1.3cmと短くなり若干内傾する。この類の立上りには基部は内傾するが、途中から直立するものもある。底部はへら削りを施しており杯蓋と同様平坦面を有する。

Ⅱb類(12・27) 天井部と体部の境の沈線はないが、口縁端部内面は沈線を有し段がつく。天井部外面はへら削りを施し、平坦面を有す。杯身は立上り1.1cmと短いか太身のもので途中からは直立する。底部外面はへら削りを施しており、平坦面を有する。

Ⅰ類はセット関係にある杯蓋の特徴からa・bに2分類できたが、杯身については大差ない。Ⅱ類もセット関係にある杯蓋の特徴からa・bに2分類できたが、杯身についてはあえて分類する必要がない。Ⅰ類の杯蓋は天井部と体部の境が若干角張るという古式の特徴が見られ

るが、杯身については、立上り端部は古式の特徴である段を有さない。Ⅱ類はⅠ類をひとまわり小形にしたものであり、杯蓋では天井部と体部の境に沈線を配するものと、配さないものがあるが、口縁端部内面にはいずれも段を有する。従って、この時期の杯蓋には肩部の沈線を消失するものがあるが、口縁端部内面にはまだ段を有している。

田川郡大任町狐塚古墳群Ⅱでは須恵器の編年を試みた際のⅢA期の杯蓋は肩部の張り^(註3)を有し、口径は15cmと大形であり、杯身は立上り^(註4)端部に段はつかないが口径14cmと大形品である。当遺跡出土の杯はこれよりひとまわり小形で、杯蓋肩部の張りが少ない事より、これと一時期を画する必要がある。従ってⅠ類をⅢB期の古い方に、Ⅱ類をⅢB期に比定する。Ⅱ類のうちa類は古式の特徴をとどめるが、b類はこの特徴を失いつつある。しかしいづれも肩部の沈線の有無を除けば略似かよっており、b類をⅣ期への過渡期の形態と考える。従ってⅢB期をⅠ類→Ⅱa類→Ⅱb類の流れで把握でき、実年代を6世紀後半に比定する。(川述)

c. 横穴について

今回の調査で14基の横穴が発掘されたが全体的に地盤が弱くほとんどの横穴が落盤しており、特に岩盤のちがう北側に横穴は所在せず横穴構築には適当な岩盤が選ばれていた。

横穴群の玄室平面形態は方形プランもしくは方形の横長プランの2つに大別される。天井形はほとんどの横穴が落盤していたため判別しがたいが6-①号、7号のように家形の天井を呈すものは大任町の「大行幸横穴群」報告書で指摘されているように他の横穴に比べ構造的に複雑で、「寧」であり、また大型でもある。特に7号横穴の斜上部には架石をほどこしてあり、この種の資料に一例を加えた。^(註5)

小型横穴は4基発掘された。2号小型横穴のようにあきらかに土器を埋納するための施設と理解できるもの。また6-②、③号のように大型の横穴の墓道に付設されたもの。1号小型横穴は現状ではどのように使用されたのか把握できなかった。

今回の調査では墓道を中途で放棄したため横穴相互の関係についてはよくわからないが、それでも墓道を共有するものとして1号と2号、前庭部を共有するものとして7号と8号、単独のものとして9号と10号があげられる。(長谷川)

註1 この種の土器について論述されたものを例記する。

高島忠平・西弘海「寿命王塚古墳出土土器」奈良国立文化財研究所年報 1971

高島忠平「王塚古墳」『京都府史』1973

石山 繁「九州縦貫自動車道関係遺産文化財調査報告」-X- 1977 福岡県教育委員会

高瀬哲郎、岩水政博他「大門西遺跡」『九州横断自動車道関係遺産文化財調査報告書』(1) 1980

佐賀県教育委員会

鬼玉真一「飯山古墳群」津原町文化財調査報告書 第3集 1981 津原町教育委員会

註2 岩瀬正信氏の御教示によると、須恵器登り窯でも焼成の最初の時期には黒変をみる場合があるが、それは軟質焼成不良品であり、色調も異なり「赤焼き」土器とは判別可能である。

註3 橋口達也・川述昭人・新原正典『狐塚古墳群Ⅱ：大任町文化財調査報告書第2集』1978 大任町教育委員会

註4 小田富土雄「野添・大満宮跡群」福岡県文化財調査報告書 第43集 1970 福岡県教育委員会

註5 川述昭人・新原正典『大行幸横穴群』大任町文化財調査報告書 第3集 大任町教育委員会 1980